



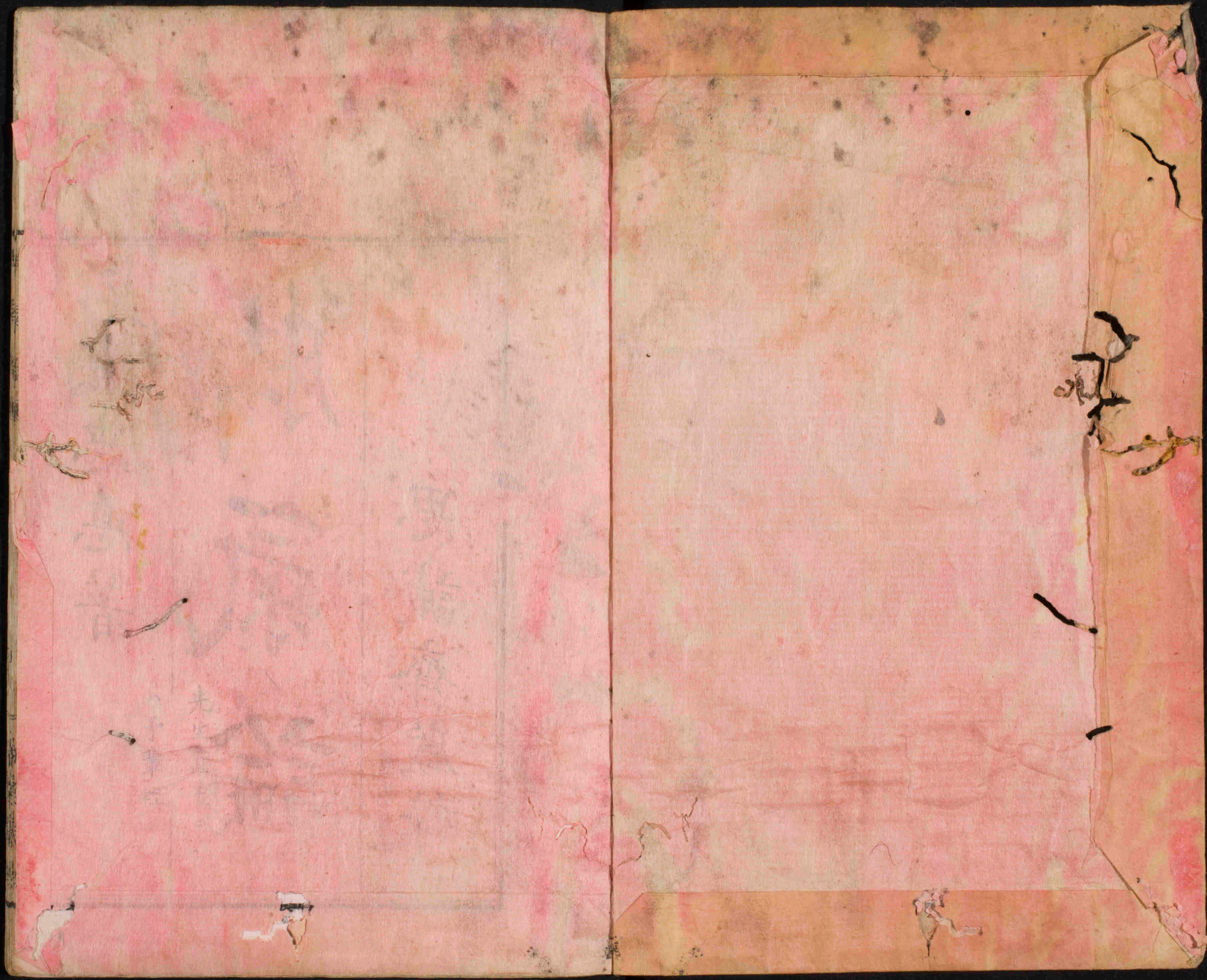
k 27-1

全

原田

天
小
イ
牛
八
會

F
カ-58



息著

白丁

梓

五重山

思婦齋

筆此病者

有八速

輕者ノ三

完全ノ良

陸軍

先生直子ニ其講

ハ予輩控々ニ看

先生認テ重大ノ徴トスルモノ

モノニシテ先生之カ明解ヲ下

成書

息著

石黒忠

脚氣

石

梓

田誠齋

脚氣論

脚氣

邦人ヲ寔スル實ニ夥

新軍此病者ヲ

宣

モノ毎年

數十人ニ下ニ

石ハ速ニ

上リ中者

ハク病床ニ委

輕者ノ三

不治スルヲク早

中症以上

完全ノ良

治ヲ收ムル也

如ト柳ナ

曩ニ談

陸軍

一等醫正石黒先生ニ質問スルニ先生直ニ其講

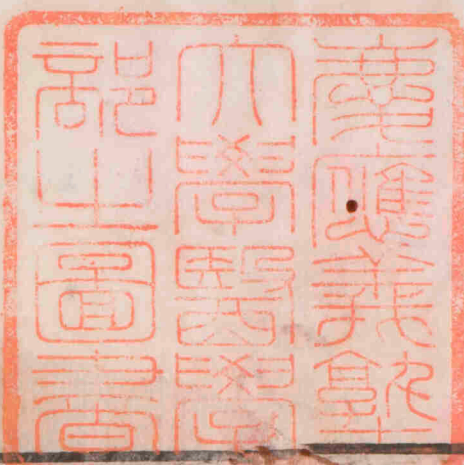
録一卷ヲ示サル披テ之ヲ閱スレハ予輩輕々ニ看

過スルモノニシテ先生認テ重大ノ徴トスルモノ

アリ予輩積年疑ヲモノニシテ先生之カ明解ヲ下

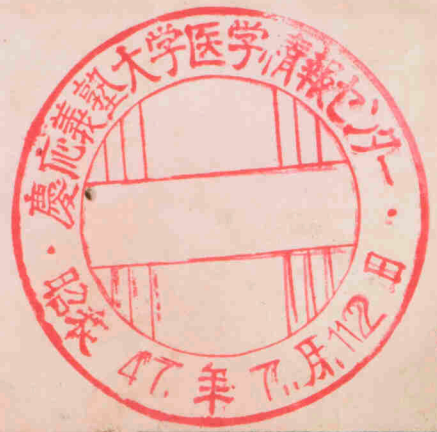
193.13
K2-2

No. 2491
112 K 27-1



スモノアリ細大論シテ餘蘊ナク友人一見シテ騰
寫ヲ要スル者多シ故ニ之ヲ上木シテ四方ニ頒ツ
然レ氏刊行公世スルハ先生ノ本意ニ非ルナリ因
テ卷首ニ當時先生副寄セララル、所ノ尺牘ヲ附刻
レ以テ序ニ代フ明治十一年三月陸軍軍醫志村徳
識於名古屋橋居

明治十一年二月廿二日
神齊先生書下



富士川文庫
2869

多甘草後平性、然中物多
澤山、一、就夫部、是、以、之、為、水
考、之、進、方、成、為、高、之、水、也、
知、之、少、而、多、也、伏、病、之、原、程、未、大
之、法、亦、多、也、得、作、之、主、治、法、我
中、外、諸、家、各、殊、一、一、之、法、如、此
考、之、之、法、述、之、如、此、以、其、其、其、
之、和、之、之、之、之、之、之、之、之、之、
之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、
之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

神齊論

二
神齊論

吾之半生心血を盡きたるは此に在り
之を以て其の功を以て示す所なり
他之少欺を以て示す所なり
是を以て其の功を以て示す所なり
生を以て其の功を以て示す所なり
うを以て其の功を以て示す所なり
志を以て其の功を以て示す所なり
此を以て其の功を以て示す所なり



脚氣論緒言

脚氣病ハ亞細亞ノ地方病ニシテ本邦殊ニ此病
ニ罹ル者多シ而シテ其病理未タ詳明ナラス專
ラ對症療法ヲ施シ命ヲ天ニ歸ス實ニ吾輩同學
ノ士慷慨ス可キ一事ナリ然レ氏當ニ吾輩學術
ノ淺陋ナルノミナラス病屍解剖ノ舉未タ少ナ
ルヲ以テ其原理ヲ究ムルニ由ナク唯症狀ヲ見
テ治法ヲ處スルノミナラズ其治術適應スルモノアル
モ必竟偶中スルモノニテ決シテ學士輩ノ安シ
テ之ニ準據ス可キモノニハ非ルナリ本編唯予

カ實視スル所ノ症狀治方ヲ錄シ考案ヲ附載シ
テ後ノ學者ヲ俟ツ

一此編固ヨリ予カ一家言ニシテ其憶想スル所ト
實驗スル者トヲ述ヘ自ラ信セサルモノト自驗
セサルモノトハ總テ闕如ス故ニ病體解剖說ノ
如キ墨兒氏脚氣論ニ於テ頗ル參考ニ供スヘキ
モノ多ケレ氏此ニ之ヲ參取セス且ツ予未タ親
ラ脚氣病者ノ屍ヲ剖視セシナキ故ニ病體解
剖并ニ血液分析表等ハ之ヲ載セサルナリ

明治十一年二月

忠惠識

脚氣論

石黒忠惠著

總論

カッ。ケ。ノ名ハ支那ノ病名脚氣ヲ轉用スルモノニ
シテ本邦固有ノ病名ニ非ス和名類聚鈔ヲ案スル
ニ脚氣ヲ註シテ阿之乃介トス然ラハ則チ本邦ニ
ハア。シ。ノ。ケ。ト名クルヲ正トシ今ヲ距ルヲ千年前
既ニ此病アリシヲ明ナリ印度地方ニ於テハ此病

ヲ「ベリベリ」ト名ツク「ベリベリ」ノ言タル或曰
羊歩ノ義ナリト或曰衰弱ノ義ナリト共ニ行歩全
カラサルヲ云フ支那人之ヲ緩風ト名ツケ脚弱ト
名ツケ又脚氣ト名ツク東西ヨク意ヲ同フス而シ
テ此病歐洲大陸ニ之ヲ見ルヲナク亞細亞殊ニ海
濱島嶼ニ多シ南亞米利加ブラジル國邊ニモ亦タ
此病多シト云フ故ニ陳獨佛等ノ醫書ニ之ヲ細論
スル者ナク和蘭英吉利ハ印度地方ニ領地ヲ有シ
軍醫其地ニ赴任スル者アルヲ以テ間此病ニ論及
スル者アリ英醫アツキン氏内科書中ニ論スルモ

ノハ友人長谷川泰君之ヲ鈔譯シ蘭醫ボンペ氏脚
氣論同ボードイン先生脚氣論并ニ世ニ行ハル近
年軍醫監林紀君ハ蘭醫ファンローフルベーキ、デメ
ーエル氏所著脚氣論ヲ口譯シテ陸軍醫官ニ示授
シ聽講者之ヲ筆記セシモノアリ墨氏脚氣論之ヲ
リ予カ所見ニ據レハ洋醫脚氣病ヲ論スル諸書此
墨氏脚氣論ヲ以テ最モ詳ナリトス唯惜ラクハ未
タ病原病理一定ノ說ナシ抑吾曹此脚氣病アル地
方ニ生レ苟モ醫學ニ從事シ未タ其病理ヲ定メ得
サルハ實ニ慷慨ニ堪ヘサルナリ然レモ本邦未タ

病屍解剖ノ數多カラス我陸軍ノ如キハ假令病者生前之ヲ出願シ其證書ヲ以テスルモ官之ヲ剖視スルヲ許サス故ニ空シク外表ノ症候ヲ實驗スルノミニシテ原理ヲ探究スルニ由ナシ然レモ後年必ス剖視スルノ期アルヲ信シ年来所見ノ症候并ニ臆説ヲ左ニ臚列シテ後ノ識者ヲ俟ツ古来脚氣ヲ區別シテ乾脚氣ト濕脚氣ノ二トナシ水腫ナキ者ヲ甲ニ屬シ水腫アルモノヲ乙ニ屬ス又或ハ炎性脚氣ト通常脚氣トシ或ハ實虛二性ニ區別シ或ハ最急性、急性、次急性、慢性ノ四ニ區別シ

其説一ナラス予ハ古ニ從ヒ乾脚氣ト濕脚氣ノ二大區別ヲ窺モ適當ノモノトス通常乾脚氣ハ濕脚氣ニ比スレハ比例少ナリ但シ病勢漸ク衰ヘ水腫減シテ後チ麻痺荏苒回復セス恰モ乾脚氣ノ如キ形狀ヲナスモノハ甚タ多シ

予輩脚氣病ヲ辨論スルモ必竟臆説ヲ免レス然レモ竊ニ案スルニ脚氣ノ毒質ハ必ス一種ノビルツニシテ東京大阪ノ如キ人口衆多ノ都會市街ニ於テハ腐敗汚穢ノ有機物地中ニ浸淫スルヲ多ク終ニ此毒質ヲ化生シ其毒大氣ニ散シ飲水ニ混シテ

體中ニ入リ先ツ腦脊髓中樞ヲ侵シ殊ニ迷走神經ヲ侵襲スルハ其症候ニ據テ明ナリ今ヲ距ル一六年前明治六年秋予此説ヲ記シテ同學諸氏ニ質シタリ。當時或人予カ大量ノ規尼涅ヲ用キ寸効ナキヲ見テ之ヲ「ビルツ」ニ非サル一証トスレ予以為ク「ビルツ」ニモ亦タ規尼涅ニ枯死セサル者ナキニ非ス現ニ「ジヒテリ」羅私等ノ「ビルツ」ハ規尼涅ニ逢フモ其増息ノ勢ヲ減スルヲナシト然ハ則チ脚氣「ビルツ」モ亦タ規尼涅ニ枯死セサルモノナラント然レ氏吾輩ノ實驗ニ於テ顯微鏡上未タ一回モ

其「ビルツ」ヲ檢出セサルカ故ニ確ト斷言スルヲ得サルナリ

此病ハ何ヲ職トスル者ニ最モ多キカヲ宿老ニ尋ルニ今ヲ距ル一凡ソ二十年前迄ハ中等以上ノ人ニ多クシテ貧困ノ者ニ稀ナリ殊ニ中等以上ニシテ家富常ニ膏粱ニ飽キテ逸居シ運動ヲ缺ク者ニ多シ故ニ士ハ中士以上庶人ハ富商ニ多シト云フ殊ニ舊幕ノ士大番ヲ勤メ大阪ニ赴任スレハ十中七八之ニ罹リ性命ヲ隕ス者モ亦多シト云フ而シテ此輩大阪ニ在ルヤ一ハ城内高燥ノ地ニ居ルト

雖氏家屋ノ造構良ナラス一ハ城外濕沾ノ地ニ居
ル而シテ共ニ城内ニ坐守スルヲ以テ職トシ頗ル
運動ヲ缺クモノナリト又同僚長瀬氏曰之ト同一
ノ話アリ其舊藩岡山ノ士始メテ東京ニ在番スル
ヲ初江戸ト稱シ時人ノ諺ニ初江戸ノ恐ルヘキハ
脚氣ト放逸ナリト二十歳ヨリ二十五六歳ノモノ
初江戸ヲ勤ムルハ必ス脚氣ニ罹ルヲ以テ國主
大ニ之ヲ患ヒ之ヲ醫員ニ質シ其逸居怠惰ニ出ツ
ルトシ大ニ武事ヲ演ヘ運動ヲ命セシム之ヲ稱シ
テ夏稽古ト云ヒ以テ一藩ノ例トセリト

英醫某氏曰脚氣ハ貧血ノ一種ナリト予甚ク此說
ヲ信セス脚氣ニ罹リ為メニ貧血ニ至ルハ常ニ目
撃スル所ナレ氏貧血ヲ以テ脚氣ヲ發スル原トス
ルハ甚ク怪ムヘキナリ現ニ本邦ニ於テ脚氣ニ罹
ル者ハ膏粱ニ飽キ又ハ充分食餌足ル者ニ多シ予
故ニ曰脚氣ニ罹リ為メニ貧血ニ至ル者ハ多ク之
アリ未タ貧血ヲ以テ脚氣ノ原トスルハ之ヲ信セ
サルナリ

十年來予カ實驗ニ徴スルニ兵隊并ニ書生ハ此病
ニ罹ルヲ殊ニ多シ詳ニ案スルニ兵隊ノ如キハ未

夕徵募セラレス其家居スル時ト比較スルニ衣食
家屋皆ナ共ニ良好ニシテ運動作業ハ時ヲ定メ何
ノ點ヨリ比考スルモ攝生上ニ一モ其在家ノ日ヨ
リ勝ラサルモノナシ然リ而シテ此病ニ罹ル者常
ニ多數ナルハ號令規律嚴正ニシテ幾多ノ精神ヲ
壓制セラル、ニ由ルモノナラン或ハ其齡少壯戒
色ノ年ナルカ故ニ書生兵隊ニ脚氣多キハ手淫ニ
原因スル者ナリト云人アレ氏予ハ其説ニ左袒セ
サルナリ予カ考案ニ據レハ兵隊書生此病ニ罹ル
者多キハ第一[○]年齢ナリ即チ談病專ラ年齢十七八

歳乃至三十歳ノ少壯者ヲ侵ス第二[○]多人群居ナリ
即チ兵隊ハ兵營ニ書生ハ塾舎ニ多人群居スル
自家ニ在ルモノヨリモ蓋シ稠密ナリ第三[○]精神上
感動ナリ即チ兵隊ハ規律嚴肅ニシテ恣ニ行動起
臥スルヲ得ス書生ハ學課定則アリテ此ニ精神
ヲ勞役スルナリ第四[○]常習ヲ變スルナリ即チ兵隊
ノ如キハ生地ヲ離レ衣住共ニ皆ナ家居ノ日ト同
シカラス且ツ家居坐スル者兵ニ入テハ日々胡牀
ニ倚ル等大ニ感スル所アルナラン。
過劇ノ運動ヲナスト多キ者ト適宜ノ運動ヲナス

者ト運動ヲナサス坐業スル者トニ於テ比較スレハ適宜ノ運動ヲナス者ニハ發病少ク坐スルト多キ者ニハ多シ又甲ノ一群ハ二時毎ニ十五分間ノ運動ヲナシ乙ノ一群ハ一日間ニ二十分間ノ運動ヲナスモノヲ以テ比較スレハ甲群ノ者ハ脚氣ニ罹ルト乙群ノ者ヨリ少ナリ然レ既ニ脚氣ヲ發スル後ハ運動セシムルトヲ良トセス又寒冒濕沾ノ衣服等ハ假令確ト之カ原因ナラサルモ誘引タルトヲ免レス暑夜涼ヲ貪リテ池亭ニ假睡シ明日急性脚氣ヲ發スル等ハ多ク目撃スル

所ナリ然レ此ニ疑フ可キ一事アリ我陸軍ノ兵初夏ノ際野營演習ヲ行ヒ數週或ハ數月原野天幕又ハ假廠ノ中ニ起臥シ或ハ濕沾ノ憂ナキニ非レ氏一ノ聯隊ニシテ甲ノ大隊ハ本年野營ヲナシ乙ノ大隊ハ本年野營ヲ為サ、ルモノヲ比較スルニ甲隊ノ兵人脚氣ヲ患フルト乙隊ノ兵人ニ比スレハ少ナリ又明治十年ハ恰モ脚氣旺盛ノ順年ニ丁レルノミカ諸兵戰地ニ在テ風雨ニ暴露スルト數十旬故ニ吾曹甚タ之ヲ苦慮シ為メ軍團軍醫部長軍醫監林紀君ニ書ヲ致シ君モ亦夕深ク之ヲ患

ヒシカ豈圖ンヤ脚氣ニ罹ルモノ必ク吾大阪臨時
病院ニ送致セシ内外科病者八千五百六十九人ノ
内内科二千五百七十九名内脚氣患者ハ僅ニ四百
六十一名為メニ死スル者三十三名ノミ例年ノ比
例ニ算スルニ極メテ僅ナリトス之ニ因テ案ス
ルニ人戸稠密ノ地ヲ離レ山村曠野大氣清淨ノ地
ニ在レハ縱令衣食ハ不充分ノ處アルモ又勞動ハ
劇キモ談病病勢ヲ逞フスルヲ能ハサル所アルナ
ラシ此一事必ス後年一理ヲ考案スルノ資タル可
シ

凡テ脚氣ニ罹ル者ハ其土着人ヨリモ客居ノ人ニ
多シ唯本邦ニ於ケルノミナラス英蘭ノ兵印度ニ
衛戍タル者ハ土人ニ比スレハ此病ニ罹ル者多シ
ト云フ

毎年五月以後ニ至レハ自ラ脚氣ト稱シ病苦ヲ訴
フル者甚タ多ク且醫家モ亦タ此病名ヲ附スル者
随テ多シ而シテ其症狀ヲ問ヘハ一日麻痺ナリ二
日心動亢盛ナリ三日小便不利ナリ四日浮腫ナリ
五日胸滿ナリト然レモ是此五症ハ或ハ尋常ノ心
臓病ヲ以テ之ヲ説明シ得ヘク又或ハ尋常ノ脊髓

病ヲ以テモ亦タ説明シ得ヘク別ニ脚氣ノ病名ヲ
立ルニ及ハサルニ似タリ而シテ之ニ一種脚氣ノ
名ヲ附スルモノハ何ソヤ予カ所見ヲ以テスレバ
其症狀ニ於テ一種特異ノ所アレハナリ特異トハ
何ソ抑此病ニ罹ル者ハ必ス一定ノ時季ヲ以テ進
退ス時季トハ大凡五月中旬以後多人一時ニ麻痺
同症ヲ發スルヲ云フナリ他病ニ發スル麻痺如此
時期ヲ定メ多人同時ニ同症ヲ發スルヲアランヤ
加之其麻痺必ス一定ノ局處ヲ限リ(下文麻痺ノ條
ニ詳ナリ)又鎮心ノ諸藥奏効少ナク土地ヲ轉換ス

レハ著シク輕快ス如此諸症決シテ通常心臟病又
ハ脊髓病ノ現スル所ニ非ス其他下文ニ列スル徵
証ヲ取テ一種脚氣ノ病名ヲ附スル所ナリ

明治四年以來予陸軍病院ニ在テ多ク此患者ニ遭
逢シ殊ニ明治六年同七年ノ兩年ハ脚氣病院ヲ擔
當シ親ク實驗スルニ該病ノ旺盛スル隔年ナルニ
似タリ今ヨリ算スレハ明治元三五七九ノ五年ハ
其勢微ク明治二四六八ノ四年ハ其勢盛ナリ患者
ノ數ヲ通計スルニ其盛ナル年ニハ微ナル年ノ三
倍ヨリモ多ク死者モ亦比例ニ多シ

症候論

上文既ニ曰脚氣病ノ症狀中認テ其正徴トスルモノヲ概論スレハ一曰麻痺二曰歩行困難三曰血行機變常四曰胸腔苦悶五曰水腫六曰小便不利等ナリ其他主徴トスルニハ足ラサレ此病ニ發スル諸症ヲ下文ニ論列ス
其一麻痺
麻痺ハ脚氣ノ本症ナリ他ノ諸症之ニ次ク患者既ニ疾患アルヲ悟ルニ至リテハ蓋シ麻痺ヲ發セシ

ヨリ既ニ數日ヲ經過シタルナリ而シテ脚氣ニ發スル麻痺ハ一種他病ノ麻痺ト同シカラサルモノナリ是レ上文特異ノ麻痺ト稱スルモノナリ特異トハ一曰時令二曰部位是ナリ脚氣ノ麻痺ハ必ス一定ノ時令即チ五月後ニ於テ發シ冷涼ノ候ニ及テ必ス去ル古人藤林普山翁曰ク脚氣ハ薔薇花ト共ニ發ラキ新露ト共ニ降ルト信ナル哉又其部位ハ指趾ノ先ヨリ始マリ口圍唇邊大小兩腿并ニ小腹ニ於テシ遂ニ腹ニ及ホス胸背上下臂等ニ及フ者八十中四名ニ上ラス而シテ口圍ハ唇ヲ去ル

凡ソ五六分ノ處ニ止リテ全顔ニ及ホサス又眼瞼ニ麻痺アル者ヲ見ス指先ハ觸覺鈍麻スルノミナラス摘撮ノ用ヲ失ヒ或ハ把握ニカヲ減ス試ニ醫士ノ示指ヲ患者ニ力握セシムルニ容易ニ擢出スルヲ得ルナリ又甚キハ諸指麻痺シテ且ツ酸痛シ把握撮摘ニ堪ヘサルニ至ル大腿ノ麻痺ハ内後面ニ甚クシテ外前面ニ輕ク小腿モ亦同シ殊ニ腓腸ニ甚シ醫士指頭ニテ摩擦スレハ患者恰モ厚紙ヲ隔テ、摩擦セラル、カ如シト云ヒ指頭ニテ腓腸ヲ撮バ多クハ酸痛ニ堪ヘスト云フ而シテ小腿

墜重行歩スレハ膝關節ニカナク一種關節軌轆スルカ如キ感覺ヲ致シ忽ニ倦勞シ或ハ跌倒シ腓腸ニ酸痛アリ又甚キニ至リテハ兩脚萎弱シテ全ク起立歩行スルヲ能ハス而シテ最初麻痺スルニ先チ、下肢ニ蟻走痒ヲ覺ユル者多シ長瀬氏曰胸部未ク麻痺セサルニ横膈ハ己ニ麻痺スル者ナリ何トナレハ打診スレハ肝胃ノ上位ニ高ク昇ルヲ見レハナリト此説頗ル味アルヲ覺ユ
此病ニ發スル麻痺ハ病初ニ於テハ皮膚知覺ノ麻痺ニシテ其皮下ニ在ル所ノ筋肉ハ知覺却テ亢盛

スルニ似タリ然レ其劇症ト經久ノ者トニ至リ
テハ肉臟貴要部ニ麻痺ヲ致シ為ノニ性命ヲ失フ
ニ至ル

其二 步行困難

脚氣病ノ行歩ニ於ケル其病名ニ示スカ如ク之ヲ
缺ク者ナキニ庶幾シ假令歩行困難ニ至ラストモ
下脚ニ倦重ヲ覺エサルハナキナリ
病初ハ下脚ニ唯倦重ヲ覺エ行歩ニ懶ク強テ歩ス
レハ屐齒數蹶屈シ漸々倦重ノ度増加シ膝關節ニ
一種ノ違和ヲ覺エ小石又ハ瑣細ノモノニ蹶倒シ

終ニ趾先全ク麻痺シ着履穿靴ニ堪ヘス下肢ノ運
動廢スルニ至ル

急性ノ者ト水腫甚シキ者トニ於テハ一週ニシテ
全ク兩脚ノ用ヲ廢シ上圖スルヲ得サルニ至ル
又急性ニアラストモ慢性ノ者ニテ久ク病牀ニ起
臥シ行歩スルヲ得サル者ハ下肢大ニ羸瘦シ筋
肉脂化遂ニ痿痺シ病苦經過シ去リ危險ヲ免ル
モ久ク起行スルヲ能ハス年ヲ超エテ尚ホ病牀ニ
在ル者多シ
其三 血行機變常

此病ニ於テ脈搏
浮大トナルモ亦
夕胃ノ膨滿スル
モ皆共ニ其筋維
麻痺シテ收縮力
ヲ失スルニ因モ
ノナリ

脚氣病輕易ノ者ト雖モ最初ニ心悸亢盛シ其脈浮
大ニシテ緊實ナラサルヲ常トス其然ラサル者ハ
殆ント稀ナリ或ハ病初ヨリ脈搏時トシテ結代ス
ルヲアリ心臟ノ位置大小音調ハ重症ノ者ニ於テ
ハ最初ヨリ業ニ既ニ變常アレモ通常ノ者ニ在テ
ハ大ナル變化ナク惟悸動亢盛シ凡ソ一週半ヲ經
テ心音第一音ハ甚タ高ク第二音ハ弱クシテ低ク
病篤ニ到レハ第二音ニ引テ雜音ヲ雜ユ脈搏ノ數
ハ九十八乃至百十ノ間ニ居ルヲ通証トシ既ニ重
篤ニ至レハ百二十搏以上ニ上ル

急性ノ者又ハ漸ク篤キニ進ミタル者ニ於テハ心
跳擾亂シ恰モ奔馬ノ如ク脈搏微數百二十乃至百
四十ニ上リテ不整ナリ此期己ニ了リ既ニ死ニ瀕
スレハ脈數小ニシテ沉衰シ益不整終ニ指頭ニ應
シ難シ

急性危篤ヲ免レテ慢性ニ轉スル者或ハ慢性ニシ
テ危險ニ迫ラサル者ハ著ク心臟ノ増大ヲ遺スヲ
見ル
其四 胸腔苦悶
脚氣病者ニシテ多少胸腔ニ苦悶ヲ覺エサル者殆

ト稀ナリ而シテ心臟機能ノ變ハ上文ニ述ル如ク
ナル故ニ心部ノ安カラサルハ勿論心經擾亂スル
ニ隨テ肺經累及セサルヲ得スト雖此中等症以下
ノ者ニハ未タ著シキ肺臟機能ノ變常スル者ヲ見
ス但シ危篤ニ迫ル者ニ於テ呼吸妨碍セラレ或ハ
窒息スル者アルハ蓋シ肺臟水腫ニ由ルモノアリ
又肺ニ妨碍ナク呼吸筋殊ニ横膈ノ麻痺ニ由ル者
アリ
病勢増進シ危險ニ傾ク者ト最急性急性ニシテ危
險ニ至ル者トニ至テハ胸部ノ苦悶ヲ訴ルト實ニ

甚シク予カ遭逢スル所ノモノニ於テモ患者其苦
悶ニ堪ヘス胸腔將ニ破裂セントスト號叫スル者
アリ或ハ刀ヲ以テ胸腔ヲ割開センヲ懇請スル
者アリ實ニ傍視スルニ堪ヘサルナリ而シテ如此
劇甚ノ苦悶ヲ訴フルヲ數時終ニ顔面蒼青ニ變シ
斃ルヲ常トス
其五 水腫

脚氣患者ノ皮膚ハ常ニ比スレハ蒼白ニシテ彈力
減スルヲ常トス水腫ハ下肢殊ニ小腿足背ニ於ル
モノ最モ多シ或ハ全身腫滿スル者アレモ脚氣患

者ハ皆ナ悉ク全身水腫ヲ致スニ非ス例スルニ大
凡脚氣患者百名中六十五名ハ水腫著シカラズ二
十名ハ下肢水腫十名ハ全身水腫五名ハ真ノ乾脚
氣ナリ而シテ乾濕ノ比例ハ年トシテ同カラズ
其六 小便不利
予ハ小便通利ノ増減ヲ以テ脚氣ノ輕重増減ヲト
定スル一大尺度トス己ニ水腫ヲ發スレハ利尿ノ
量ヲ減スルハ固ヨリ辨ヲ俟スト雖モ假令水腫ナ
キ者ニテモ脚氣患者ハ必ス尿量減少スルヲ常ト
ス而シテ其尿ハ異重增多シ其色濃厚尿素ヲ含ム

ト多ケレモ蛋白血球ヲ混スルヲナク又化學反應
性ヲ變スルヲナシ○水腫甚シク或ハ病度危篤ニ
達シタル者ニ於テハ全ク尿閉スル者アリ乾脚氣
ニテモ二十四時間ノ尿量五六号ニ至ル者アルハ
數目撃スル所ナリ尿量減シテ二十四時間ニ十五
六号ニ至ルハ常ニ見ル所ニシテ遠ク意トスルニ
足ラサレモ減シテ十号以下ニ至レハ深ク慮ラサ
ルヘカヲサルナリ而シテ其利尿宜シカラサル所
以ノモノハ蓋シ尿ノ分泌機能ニ妨碍アル者ニシ
テ決シテ己ニ分泌シテ膀胱ニ在ルモノ利セサル

ニハ非ルナリ或ル説ニ此ニ利尿妨碍セラる者ハ專ラ膀胱麻痺ニ因ル者ナリト云フト雖氏予ハ之ヲ信セス何トナレハ著シク膀胱ニ充滿スル者トカテーテルヲ插入シテ利尿スル者トヲ多ク見サレハナリ

以上六症ハ脚氣病者ニ普通發現スル所ノ症状ニシテ之ヲ主徴トスルモ可ナリ以下述列スル所ノモノハ普通ノ症状トナシ難ケレ氏往々遭逢スル所ノモノナリ

腦脊髓系症候

上章既ニ論スル如ク脚氣ニ發スル諸症ハ蓋シ迷走神經ニ障碍アルニ似タレ氏是全ク臆想ノ説ニシテ確ト其解剖的變常ヲ認メタルニ非サル故ニ之ヲ詳論シ難シ

精神ハ病初ヨリ沉鬱スルヲ常トス或ハ死ニ瀕スルニ及ンテ昏睡スル者アレ氏稀ナリ多クハ斃ルハニ至ルマテ思想違ハス正シク病苦ノ劇甚ナルヲ訴ヘ或ハ性命ノ續ク可ラサルヲ慮テ後事ヲ人ニ託スル等ハ常ニ見ル所ナリ他ハ麻痺ノ條ヲ參互ス可シ

眼中別ニ異狀ヲ呈セス予嘗テ又シク瞳孔ノ大小
形狀ニ注意シタレト著シキ變常ヲ認得サリシ視
力ハ死ニ瀕スル凡ソ半日乃至一日前ヨリ之ヲ失
フ者多シ又死ニ瀕スル者ハ大抵眼球上竄ス
聽機ハ視力ノ如クナルモノナク死ニ至ルマテ敏
捷ナリ

嗅機ハ頗ル鋭敏ニ至ル諸種ノ食氣ヲ嗅別シ大抵
ハ魚鳥肉餌ノ馨香ヲ忌避ス
味覺ハ病初ヨリ幾分カヲ失シ多クハ蔬菜ヲ好シ
テ肉餌ヲ嫌フ又食嗜漸々減少シ重篤ニ至レバ殆

ト絶ス尚ホ下文消食系ノ條ヲ參互スヘシ
觸覺ノ事ハ前文麻痺ノ部ニ悉セリ故ニ此ニ列叙
セス

消食系症候

病初ヨリ多クハ食後胃部故ラニ壓重ヲ覺エ食嗜
漸々缺亡シテ渴ナク病増進スレハ肉餌ヲ忌ミテ
却テ蔬菜ヲ好ミ舌乾燥シテ渴苦ヲ帶ヒ渴アリ氷
ヲ好ム又病増進スレハ胃部著シク膨脹シ自ラ其
膨満ニ苦ムト甚タシ又輕キ胃腸加苔兒ノ症ヲ呈
ス

脚氣病者ニ於ケル消食系症候ニテ最ニ着目ス可
キハ嘔吐ナリ病既ニ増進シ嘔吐止マサルモノハ
予カ實驗ニ徴スレハ確タル死徴ナリ予此嘔吐ヲ
鎮定セント欲シ沸騰散、炭酸水、阿片劑、莨菪劑、蓆酸
攝留母硝酸毘私密篤、老利爾水等ヲ與ヘ或ハ胃部
ニ莫爾比涅ノ皮下注入、引赤法等ヲ行ヒタレハ一
モ奏効ナク終ニ稀青酸ヲ用斗タレハ亦効ヲ收メ
シヲナシ唯氷塊ヲ與フレハ假令鎮定ノ効ナキモ
亦タ僅ニ苦悶ヲ凌クニ足ルノミ蓋シ心臟病或ハ
脊髓病ニ嘔吐ヲ發スル者ナキニ非レハ別ニ死徴

トスルニ足ラス然ルニ特リ此病ニ於テ嘔吐アル
者ハ之ヲ確ト死徴トスルニ足ルモノハ之モ亦タ
脚氣病ノ一特症トス可キナリ

本邦ニ於テ脚氣ヲ患フル者赤小豆粥ヲ食イ以テ
療法ノ一トス其原蓋シ漢方ニ赤小豆湯ノ方アリ
利尿ノ効ヲ稱スルニ因ルモノナラン而シテ患者
食嗜既ニ減シタル者好シテ此赤小豆粥ヲ喫シテ
飽サルモノアリ精神ノ固信スルヨリ終ニ此消食
系ニ一種ノ運用ヲ發揮スルモノカ或ハ此病ニ罹
ル者此粥ニ堪フルノ性アルモノカ又タ奇ナラス

ヤ
大便ノ通利ハ平常ニ異ナラス而シテ病既ニ重キ
ニ至リ下利荏苒止マリル者ハ不良ノ一症ト認メ
テ可ナリ
呼吸系ハ血行系ノ妨碍ニ累及シテ變常スルモノ
ニ似タリ呼吸筋麻痺ノ他ハ單ニ呼吸系ニ妨碍ヲ
生スルヲ見ス而シテ喉筋麻痺シ聲音嘶啞スル者
ハ往々之アリ
肝臟ハ脚氣病者十人中四五人ハ多少増大スルモ
ノナリ然レモ全身ニ肝臟病ノ徵候ヲ呈セス唯打

診上ニ之ヲ知ル而已脾臟ハ肝ノ如ク増大スルモ
ノヲ見ズ

腎臟ハ必ラス變常スルモノナラン宿老ノ説ニ往
々腎部ニ疼痛ヲ發シ水蛭又ハ芥子泥ヲ貼シテ効
アリタリト云フト雖トモ予ハ未タ之レヲ實驗セ
ス

輕症ノ者ニ於テハ全身ノ熱度ニ變常ナケレモ長
瀬氏ノ精細ナル試験ニ由レハ中等以上ノ重症ハ
午後三四時ヨリ必ス發熱ス患者自ラ覺エサルモ
大約三十八度以上ニ至ル但シ三十九度ニ昇ルモ

ノハ甚々稀ナリ而シテ脚氣諸症ノ天熱高低ニ關
スル最モ甚シ其中等症トスルモノモ暑熱頓ニ酷
烈ナレハ忽チ重症トナル其死スルモ亦夕酷暑ノ
度ニ隨テ其數ヲ増ス是正シク病體ニ就テ實驗ス
ル所ナリ故ニ暑熱ノ候ニ當リ僅ニ冷涼ノ日ヲ重
子頓ニ暑熱加フル日ニハ必ス諛患者ノ命ヲ墮ス
ヲ見ルナリ
脚氣患者ニハ下顎腺頸腺ハ腫脹ヲ兼ル者往々之
アリ而シテ其甚キ者ハ不良ノ一徵タリ又梅毒患
者ニシテ脚氣ヲ兼發スル者ハ豫后極メテ不良ナ

リ

治療論

諛病ノ病理未タ詳カナラス故ニ固ヨリ根治時効
ノ藥方ナシ吾曹唯對症療法ヲ施ス而已漢方ニ於
テハ甘遂牽牛子大黃硝石檳榔子大腹皮木瓜川芎
茯苓木通沈香犀角烏藥半夏紫蘊桑白皮生薑厚朴
當歸覆旋花猪苓澤瀉砒石汞劑等ヲ彼是配合シ與
ハ二十年前ノ洋方家ハ牡蠣硝石滑石大黃芒硝等
ヲ處方ス此ニ予實驗スル所ノ治法ヲ左ニ掲ク

指先又ハ口圍ニ麻痺ヲ覺ヘ或ハ下脚微ニ腫重シ
腓腸ヲ握レハ内筋酸痛シ外表ハ却テ麻痺スル者
ニ水製保美加越吉私三ハ甘草末十ハヲ十二丸ト
ナシ一日三回ニ分服シ兼テ滋養ノ食ヲ資ラシ
メタルニ麻痺水腫治セサルハ三ナラス却テ酸
痛ヲ加フルモノ多シ
民埜列里精一ヲ甘硝石精一ヲ水三ヲ合劑ヲ
與ヘ發汗セシムルニ一二日間ハ麻痺水腫減ス
レ氏隨テ再發シ全治スル者少ナリ

酢酸加里三十ハ乃至一ヲ杜松子精一ヲ水三ハ
ノ合劑ヲ與フルニ利尿来リ浮腫減スレ氏麻痺
減スル者少ナリ

前症ニ兼ヌルニ心動亢進シ脈搏百二十ニ達シ利
尿著ク減シ浮腫亦タ多ク兼テ胸内不安ナル者ニ
實芟荅利私葉十二ハ乃至十六ハヲ沸湯五ヲニ
浸出シ之ニ酢酸加里四十ハ或ハ硝酸加里一ヲ
ヲ加ヘ一日三回ニ分服セシムルニ十中凡ソ三
人ハヨク適應シ鎮心利尿ノ効ヲ奏スレ氏他ハ
其効ナク或ハ却テ心動ヲ奮興スルモノアリ

米國製ヘラトリ子丁幾四滴乃至六滴ヲ護謨漿
三汚ニ和シ一日二回ニ分服セシムルニ鎮心ノ
効速ク實芟荅利私ニ及ハス加之患者之ヲ吐逆
シテ服シ得サル者多シ
以上對症治法ヲ施セハ多少奏効ナキニハ非レド
全治スルヲナシ因テ予以爲ク病原未タ詳カナラ
サレド必ス一種ノビルツ其原ヲナスモノナル故
此ビルツヲ撲滅スルニ非サレハ決シテ根治スル
ヲナシト乃チ專ラビルツヲ抑制スル方法ヲ處ス
先ツ規尼涅製劑ノ適症ナルヲ考定シ左方ヲ與フ

塩酸規尼涅十ハ乃至二十ハヲ溶劑又ハ丸トナ
シ頓服セシノ又ハ一日五回ニ分服セシムル
或ハ三日或ハ五日其久キハ一週間持長スレド
効ヲ見ス其後一患者ニ
塩酸規尼涅半ヲホーレル水二滴水三ツノ合劑
ヲ一日二回ニ分服セシムル一連二日患者頭重
耳鳴諸規尼涅瞑眩ノ症ヲ呈スルノミ少シモ病
勢ノ挫折スルヲ見ス此ニ於テ規尼涅ノ効ナキ
ヲ悟リ
石炭酸一分、クリセリネ十分、水四十分ノ溶液十

滴ヲ軍舍利別半勺、水三勺ニ和スルモノヲ一日
二回ニ分服セシム
亞硫酸曹達一勺、水三勺ノ合劑ヲ一日二回ニ分
服セシム
右ノ諸方ハ多クハ脚氣初期ノ者ニ與ヘタレバ
病勢ヲ撲滅シタルヲ見ズ
サリレ子酸四十ハ重炭酸曹達二十ハ、軍舍利別
半勺、水三勺ノ合劑ヲ作り脚氣初期ノ病者五人
ニ與ヘタルニ一人ハ尿ノ通利頗ル進ミ一人ハ
發汗シ隨テ治シタレバ三人ハ毫モ奏効ナカリ

シ

因テ爾後ハ輕症ニシテ水腫麻痺共ニ輕微ナル者
ニハ發表ノ方劑
氏埤列里精一勺 甘硝石精一勺
重炭酸曹達一勺 水三勺
右調勻三回ニ分服セシメ或ハ
ジャボランヂー葉一勺 沸湯四勺
右浸出温メテ頓服セシム
兼テ「ラ子ル」襯衣ヲ服サシメ務メテ安靜ニ温保
セシム或ハ發表劑ヲ與ヘズ舍利塩下劑ヲ兩日間

連用セシム
前症ニ比スレハ病度稍重ク兩脚微腫シ口圍又ハ
指先麻痺シ脈搏度ヲ加ヘ胸腔稍不安兼テ尿量減
少スル者ニハ
實芟啓利私葉至十二六八乃ヲ沸湯五号ニ浸出シ杜
松子精一号醋酸加里一号ヲ加ヘ一日三回ニ分
服セシメ脈搏減シテ常數ニ復シ尿量増加スル
ニ至テ止ム或ハ醋酸加里ヲ去テ硝酸加里一号
ヲ加フ患者多クハ醋酸加里ヲ忌テ硝酸加里ヲ
好ムモノナリ

前方ヲ與フルモ効ナク或ハ胸腔漸ク安カラサル
者ニハ下劑ヲ與フ

舍利塩半号 セン浸二号 水一号

右頓服セシム或ハ

甘汞五号ヤラツバ末二十号ヲ一包トナシ頓服

セシム

二三行ノ快通ヲ得レハ十中五六ハ輕快ヲ覺ユ抑
脚氣ニハ屢中和塩下劑ヲ試用シタレハ甘汞下劑
ニハ若カサルニ似タリ此甘汞ノ適應スルハ彼
ルツ發生ヲ撲滅スルカ或ハ吸收作用ヲ催進シテ

以テ貴要部分ノ水腫ヲ減スルカ或ハ唯下泄誘導
ノ効ニ由ルモノカ未タ詳ナラサレ予カ實驗ニ
徴スレハ度々之ヲ用キテ頗ル奏効アルモノトス
如此シテ奏効ナキ者ニハ頂背ト心部ニ血角乾角
水罨法ヲ行ヒ或ハ芥子泥ヲ貼シ又ハ芫菁發泡膏
ヲ貼シテ引赤シ四肢ニ溫擦法ヲ行フ
胸腔ノ苦悶甚シク心跳脈搏奔馬ノ如ク患者病牀
ニ安臥スルヲ能ハス顛轉反側スル者ニハ實艾荅
利私葉亞國「ヘラトリ子エキス」等ヲ内服セシムレ
尺寸効ナク却テ催嘔ノ害アリ心部皮下ニ莫爾比

涅ヲ注射スレハ僅ニ苦悶減殺スレ尺其効久シク
持續セス大量ノ瀉血ハ一時鎮靜ノ効アレ尺以テ
死ヲ速クニ似タリ大量臭素加里ノ内服効アルニ
似タレ尺吐逆シテ之ヲ嚙下スル者少ナク予ハ此
際ニ於テハ唯全胸ニ水罨法ヲ四肢ニ溫擦法ヲ行
フ嘔吐甚キ者ニハ諸般ノ鎮靜劑以シモ効ナシ嘗
テ「アツキン」氏ノ說ニ據テ少量青酸ヲ水ニ和シテ
用キタレ尺亦タ効ヲ見ス故ニ止ムヲ得ヌ唯水塊
ヲ與ヘ時トシテ莫爾比涅ノ皮下注射ヲ行フノミ
乳汁肉羹汁ニモ亦タ水塊ヲ加ヘ殊ニ乳汁ニハ必

竜腦六分麝香六分
白糖十二分
右四包トナシ毎半
時一包ヲ與フ
炭酸安摸尼一分
蒸餾水五分
右調勻シ毎半時或
一時二十滴ヲ水ニ
和シ與フ

量、石灰水ヲ加ルヲ良トス

衰弱甚ケレバ龍麝安摸尼酒類ヲ與ヘ龍腦或亞的

兒ヲ皮下注射シテ一時ノ回陽ヲ謀ル

病機慢性ニ轉シ唯四肢ノ麻痺ヲ遺ス者ニハ強壯

補血ノ目的ヲ以テ

塩酸規尼涅四分、乳酸鐵六分、水製保美加越吉私

三分

右健質亞那越吉私ヲ用テ十二丸ニ作り一日三

回ニ分服セシム但シ保美加越吉私ノ量ハ麻痺

ノ度ニ從テ或ハ一日六分ニ至ル故ニ保美加ハ

別ニ丸劑トシ與フルヲ便ナリトス

右ノ劑ヲ與ヘ兼テ醇好ノ赤酒并ニ乳汁肉羹汁ヲ

飲マシメ日々適宜ノ散步ヲ命シ若シ躓テ歩スル

ヲ能ハサル者ニハ自身又ハ看病者ヲメ兩足ヲ按

摩シ又夕平流電機ヲ導達シ或ハ溫浴ヲ行フテ偉

効アリ四肢ニ酸麻ヲ遺ス久シキ者ニ前方ニ少

量ノ草鸞菊越吉私ヲ加用スルヲアリ

以上所述ノ他偶發症アル時ハ相應ノ對症療法ヲ

施スヘシ或ハ初期ニ麥奴越吉私ヲ稱用シ末期ニ

沃度加留母ヲ賞用スル人アレド予ハ多ク之ヲ用

井ス隨テ偉効ヲ實視セサルナリ
前文ノ對症療法ヲ施シ秋季冷凉ニ至レハ治ス嘗
テ一年斷塩療法ヲ試ミタルヲアリシニ將ニ危篤
ニ陥ラントスルノ前斷塩スルト一週或ハ一週半
ナレハ或ハ危篤ヲ免ル、トアレハ治愈ニ赴キテ
經過故ヲ憶慢ナルヲ覺ユ
總テ述ル所ノ療法ニ卓絶シテ必効アル者ハ轉地
療法ナリ最初轉地スレハ病重キニ至ラスシテ治
レ若シ重キモノモ多クハ死ヲ免ル、ナリ予カ實
驗ニ徴スレハ既ニ下肢水腫麻痺シテ歩行スルヲ

能ハス看護者ノ助ニ賴テ兩便ヲ致シ且胸腔苦悶
スル者ヲ二十里乃至三十里ノ遠地ニ致セハ即日
大ニ快爽レ凡二三週ニシテ治ス東京陸軍本病院
ニ於テハ毎年上州伊香保又ハ相州箱根ニ送致ス
ルヲ法トス東京ニ在テ水腫麻痺甚シク數日食嗜
ナキ者ヲ強テ馬車又ハ人力車ニ乗シノ高崎ニ至
レハ既ニ食氣催シ利尿来ルハ常ニ目撃スル所ナ
リ又予カ友人西脇悌二郎ハ毎年脚氣ニ苦シムヲ
以テ或年最初直ニ伊香保ニ轉地セシメシニ一週
半ニシテ全治シ歸京シタルニ歸京ノ日ヨリ再發

シ在京西日ニシテ諸症稍進ニ復タ轉地セシニ直
チニ全治シタルヲアリ而シテ此轉地ナルモノハ
決シテ温泉ノ所在ニ限ラス土地高燥山水佳麗ニ
シテ大氣清淨ノ處ヲ要スルニ似タリ蓋シ脚氣^ビ
リツノ増息ニ於テ大氣大ニ關係ヲ有スルモノナ
ラン

因ニ曰慢性脚氣ノ末期麻痺久シク復セサル者
ニ施シテ偉効アルヘシト想定スルモノハ灸ナ
リ然レ氏予未タ灸ノ定則ヲ學ハス假令之ヲ學
ビ得ルモ之ヲ解剖生理ノ學的ニ徵シタル後ニ

非レハ予輩之ヲ稱用スルヲ欲セス後日針灸
ノ事ニ於テ論スル所アラントス抑吾醫學タル
一方ニ偏ス可ラス博ク採收スルヲ要ス然レト
モ唯漫ニ採收シテ之ヲ真理ニ徵セサレハ亦タ
無據妄誕ノ弊ヲ生ス嗚呼難イカナ

著者

正六位勲四等 石黒忠恵

新潟縣平民

東京第三大區五小區牛込
袋町二十六番地寄留

東京府平民

出版人

島村吉松

第壹大區十三小區濱町
竜丁目十八番地

發兌書林

東京 島村利助
丸屋善七
大阪 丸屋善八
松村九兵衛

石黒先生著述目錄

發兌書舖

英蘭堂島村利助

化學訓蒙前篇

全 五冊

同 後篇

全 二冊

虎烈刺論

全 一冊

痢病論

全 一冊

贗藥鑒法

全 一冊

醫事鈔

冊數未定

內科簡明

林石川三先生合著

全 十八冊

外科說約

全 二十冊

增訂化學訓蒙

全 八冊

リンドルペスト説

全 一冊

藥品溶解表

一 枚摺

新量瓦蘭表

一 枚摺

長生法

附録

救急法

全 二冊

日用局方

全 一冊

外科通術

全 五冊

化學訓蒙第三版

全 四冊

脚氣論

全 一冊

陸軍醫部
海軍病院
醫學校

官版御用所

拙舖累世書籍ヲ常キ近年醫書及ヒ翻譯書ヲ專
ニス都鄙一般醫學大家著述レ玉フ所アレバ多
クハ拙舖ニ發兌ヲ命セラル故ニ海内新刊ノ醫
書ハ必ス備エテ以テ漏スナカラントス仰願
クハ書ヲ求メ玉フ諸君子高顧アランコトヲ

書肆

東京馬喰町二丁目

英蘭堂 島村利助

